

即刻開悟の鍵 1

スプリームマスター チンハイ

目 次

スプリームマスター チンハイのプロフィール 愛の道	5
1 真理と間違った道理	11
2 超世界の音	43
3 超世界の光	73
4 「花が開いて仏陀を見る」とは何か	107
5 観音法門の修行の利益	131
6 カルマはどこから来るのか	167
7 すべての修行法門は観音法門である	199
8 智慧眼の奥義	227

9	阿修羅衆生	259
10	悟りを開くとは何か	301
11	仏陀とは何か	335
12	三界以下の概況	371
13	善行や施しだけでは解脱できない	407
14	仏陀を拜んでも仏陀にならない	433
15	ビーガン（完全菜食）がもたらす利益	461
	印心―観音法門	487
	出版物の紹介	491
	私たちへの連絡方法	497

スプリームマスター チンハイのプロフィール…愛の道

スプリームマスター チンハイは、世界的に有名な靈性の指導者であり、芸術家、慈善家であります。彼女の愛の心はあらゆる文化と人種の壁を越えて、世界中の隅々まで届いています。マスターはオウラック（ベトナム）の中部に生まれ、青年期にはヨーロッパに留学し、そこで赤十字に勤務しました。その間、彼女は世界の至る所に、苦難に満ちていることを目の当たりにしました。それで苦難からの救済方法を探し出す決意をし、これが人生の目標となりました。当時スプリームマスター チンハイはドイツ人の医師と結婚していて、幸福な家庭生活を送っていました。別れることは彼らにとって極めて困難な選択でしたが、彼女は最後には、夫の祝福のもと夢を求めて旅立ちました。スプリームマスター チンハイは求道の旅を始め、靈性の開悟を追い求め、最後にヒマラヤで悟りを開いたマスターから、内面の光と音を観るメディテーション法門を伝授されました。これは後に彼女が伝授している「観音法門」です。彼女はある期間、修行に精進し、完全に悟りを開きました。

一九八〇年代に、スプリームマスター チンハイ インターナショナル アソシエーションが発

足されました。そのアソシエーションの主旨はマスターの教理です。そして人々の真摯な要望により、スプリームマスター チンハイは「観音法門」を伝授し、人々に自分の内面の偉大な本質を見付けだすよう、励ましてきました。後にアメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカの五大洲と国連の招聘に応じ、現地に赴き講演をしました。

スプリームマスター チンハイは慈悲にあふれ、貧困弱者に力を尽くして援助しています。彼女の慈善活動は世界のあらゆる境界を越え、世界各地の貧しい人々や、苦しい状況にある老人、受刑者、心身障害者、ホームレス、アメリカの退役軍人たちにまで及んでいます。地球温暖化により、さまざまな危機を誘発している現在、スプリームマスター チンハイは数百万ドルを寄贈して、人道的援助を行うと同時に、インターナショナルアソシエーションのメンバーが世界各地に赴き、被災者を助けるよう指示し、数えきれない人々を助けてきました。その他、スプリームマスター チンハイの愛は、地球上の貴重な友である動物や生態環境にまで及んでいます。彼女の慈悲深い愛は、世界の多くの人々を感動させ、人々に無私の愛の手本を示しました。マスターはまた、絵画、ランプのデザイン、ファッションデザイン、ジュエリーデザインなどの芸術創作活動を通して得た収益を、助けを必要とする神の子たちのために使っています。

近年、スプリームマスター チンハイは三部作を出版しました。「バード イン マイライフ」「ドッグ イン マイライフ」「気高い野生動物」この三部作はいずれも国際的にベストセラーに

なり、さまざまな言語に翻訳されました。これらの本はマスターが霊的なコミュニケーションと洞察力をもって、人類の友である動物たちの情感と考えを記録したもので、動物たちの高貴な精神と無私の愛を表したものです。

また道徳を広め、人々に見習うよう励ますために、スプリームマスター チンハイは二〇〇六年三月に「輝く世界の指導者賞」を設け、後にまた、「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の愛情賞」「輝く世界の誠実賞」「輝く世界の発明家賞」などを設けました。これらの賞の受賞者は個人もいれば、国家や団体も含まれています。彼らは世界に手本を示し、平和と美しい地球の持続的発展のために大きな貢献をしました。たとえば、スロバニア共和国の第二代大統領ヤネス・ドルノウシエク博士、アメリカの第四五代副大統領アル・ゴア（国連気候変動に関する政府間パネルと共同で二〇〇七年ノーベル平和賞を受賞）、国連気候変動に関する政府間パネル議長、インドのエネルギー研究所の所長のラージェンドラ・パチャウリー博士（二〇一〇年に

UN-HABITAT 都市スピーチ賞を受賞）、NASAゴダード宇宙科学研究所主任研究員ジェームス・ハンセン博士（二〇〇九年にロスビー研究賞を受賞）、イギリスの有名な霊長類学者ジェーン・グドール博士です。

スプリームマスター チンハイも「輝く世界の英雄賞」「輝く世界の知性賞」を人類のよき友である動物たちに授与しました。もって動物たちが危険を顧みず、他の命を助けだした無私で

健全な行動を称え、動物たちの愛に満ちた勇氣と聡明さと思いやりの精神を称えました。

スプリームマスター チンハイは靈的な面だけでなく、物質面でも世界に多大な貢献をしています。彼女自身はいかなる報いも求めていませんが、世界各国の政府や非営利団体は彼女の献身的な奉仕を称えて多くの賞を授与しました。たとえば、二〇〇六年グシ平和賞、二〇〇六年第二七回テリー賞銀賞、二〇〇二年ロサンゼルス・ミュージック・ウィーク表彰状、一九九四年世界精神指導者賞、一九九四年世界市民人道主義者賞などです。この他にアメリカ政府の官僚から、二月二二日と一〇月二五日をチンハイデーと定められました。今でも彼女はこの世界を助けるために全力を尽くしています。数多くの世界のリーダーたちと民衆は、彼女に対し感謝しています。

スプリームマスター チンハイは環境保全の先駆者としても有名です。彼女は智慧と勇氣をもって、気候温暖化問題に対し、警告を発しました。実際、彼女は二十数年前から、すでに環境保全を呼びかけています。彼女が「もう一つの生き方」、「SOS地球温暖化を阻止しよう」という活動を地球規模で展開し、地球温暖化阻止国際会議にも出席し、ゲストとして、基調報告を行い、人々に現在世界的に頻繁に起きている、災害の根本的な原因と解決の道を示しました。それはつまり、慈悲深い、ビーガンライフスタイルです。現在、人々によく知られている「ベジタリアン」になって、平和な世界を創る」これはスプリームマスター チンハイが発案したスロ

ーガンです。

食生活が気候に大きな影響をもたらしていることから、人々に慈悲に満ちた、持続可能なライフスタイルを提供するため、ビーガンレストラン「リビングハット」はスプリームマスターチンハイの呼びかけに応じて大きく発展しています。これらのレストランは大人気を集め、世界各地にチェーン店があり、安くて美味しく、しかも栄養バランスのとれた、様々なビーガン料理を提供しています。人々に健康的な食生活を勧め、最も有効な温暖化阻止の道を示しています。それにより、この地球と住んでいる人々、そして生きとし生けるもの、私たちの子孫を保護し、地球温暖化よってもたらされる、絶滅的な危機を免れるよう最善を尽くしています。

この時代において、スプリームマスターチンハイは献身的に奉仕し、苦勞をいとわず、世界の人々を助け、大事な地球のために、光り輝く未来を切り開いています。

メッセージ

靈性の師であり、芸術作家でもあるスプリームマスター チンハイは、内面の美を表現することとを、こよなく愛しています。そういうわけで、彼女はベトナムを「オウラック」、台湾を「フオルモサ」と呼んでいるのです。オウラックはベトナムの古称で「幸福」を意味し、また、フオルモサの名はその島と人々の美をより完全に表しています。マスターはこれらの名称を使うことで、その土地と住人の靈性を上昇させ、福報をもたらすと感じているのです。

ビーガンのライフスタイル

スプリームマスター チンハイは講義の中で菜食について言及しています。二〇一〇年からは「ビーガン食生活」を人類の理想的なライフスタイルとして力強く、熱心に、強く推進していきます。これも博愛の精神によるもので、ビーガン生活は動物たちが受けている大きな苦しみをなくし、人々が病気による苦しみから免れるためでもあります。また二〇一〇年四月十四日からビーガン食生活を印心の条件の一つに定めています。（ビーガンとは全く動物性成分も含まれていない食べ物のことを指します。つまり乳製品、魚、鶏と卵（受精卵、未受精卵を含む）などです）



真理と間違つた道理

スプリームマスターチンハイフォルモサ・台北

一九八六年十月二十日

法を弘める時、この肉体や車に頼らなければなりません。また、講演を聞きに来る人がいないとできません。人々が講演を聴きに集まって来ても、私たちの車が動かなくなったり、車が動いても運転する人がいなくなったりするかもしれません。また、運転する人がいても聴衆が来ても、私が病気になるかもしれない。みなさんは私が病気のために講演会を中止したと、聞いたことがありますが。まだないですね。そうでしょう。時には病気になつてもしなければならなかったのですが、みなさんは知らないだけです。この世界で法を弘めることは簡単なことではありません。なぜなら、この世界中のすべての物質的なものは魔のパワーから作られたからです。物質的なものとはどんなものでしょう。この肉体、ご飯、飲み水、衣服などすべて魔のパワーから作られたもので、物質的なものを相手に仕事をするのは簡単ではありません。なぜなら、私たちは法を弘めなくてはならないからです。法とは何でしょう。それは触ることのできない

もの、説明したくても容易ではなく、せいぜい少し話せるくらいです。本来、真理は口で言うものではなく、言語で表現することができません。ですから、この肉体で法を説明したり、物質的なものを使って法を弘めたりすることは簡単ではありません。物質的な物は粗雑で、智慧のレベルに属していません。この智慧を持っていないものを使って、大智慧の状況を説明することはあり得ないことです。

第一に、粗雑なもので無限な大智慧を説明するのは難しいことです。第二に、聴衆もまた、物質的な道具に頼って経の講義を聞きに来ているので、高尚で不可思議な最高の教理、大智慧を理解することは簡単ではありません。両方とも容易なことではありません。私が講義をするのも簡単ではありませんし、みなさんが聴くことも簡単ではありません。ですから、真理を理解することは実に容易ではありません。

真理を理解するには自分自身の仏性で認識し、体験すべきであり、真理を伝えるにも言葉ではなく「以心伝心」でなければなりません。歌を歌い、仏陀に礼拝し、念仏したり、経の講義をしたりすることはすべてABCの初歩段階にすぎません。みなさんはまずABCを聞いて、それから好奇心が湧いてきてもっと知りたくなり、もっと自分のレベルを向上させたいのです。毎日ただABCを唱えるだけではつまらなく感じるでしょう。このことを理解するには、「印心」を受けなければなりません。それが私たちの法門です。

法門と言つても何もありません。けれども、印心は非常に重要です。印心とは「以心伝心」のことで、心とは意識のことです。心で法を伝えるのです。法を伝えるとは決して話すことではありません。私が言葉で道理を話して、みなさんにどうすべきかなどと教えることではありません。そういうことは外面的な次元に属することです。

印心の時、私はみなさんに「やつてはいけないこと」を教えます。話の内容はいずれもやつてはいけないことで、何をすべきかではありません。私はみなさんにこれはダメ、あれもダメ、何でもダメと言います。そしてこそ、自分の仏性を見つけることができるのです。これは矛盾しているように聞こえますが、そうではありません。というのは、私たちはいつも外面に向けて仏性を探しているからです。それで私のところに来ると、私はみなさんに、外面的なものに執着しないように、これはダメ、あれもダメと言うのです。しかし、この「ダメ」は法門ではありません。もし私たちは本当に少しでも手放すことができるなら、一瞬にして「悟り」を体験することができるのです。

印心は容易ともいえますが、難しくもあります。容易というのは、印心の時、一瞬にして悟りを開くことができます。けれども、印心を伝授することができる人が必要です。そのような人を見つけることは容易ではありません。印心は面倒なことだと言っているのではなく、悟りを開くことも難しいことでもなく、手に届かないことでもありません。解脱をすることは決し

て難しくなく、悟りを開くこともみなさんが思っているほど難しくありません。ただ、私たちに悟りを開かせてくれる人を見つけないことこそが、一番難しいことです。

印心は多くの人に伝えることもあれば、たった一人に伝えることもあります。これはその印心を伝えるマスターによって決まります。ですから、古代禅師の中には弟子が数人しかいない禅師もいました。老子を知っている人はほとんどいませんでした。菩提達磨には五人の弟子がいました。慧能の弟子は少し多くて、釈迦牟尼仏の弟子はもっと多く、イエス・キリストはたった十二人の弟子がいただけです。彼はもう少し多くの人にも伝法したかもしれませんが、この十二人は最も悟りを開いた弟子たちです。

みなさんはこう自問するかもしれません。印心後はみんな悟りを開いた人になったのに、お悟りを大きく開いた人もいれば、そうでない人もいます。ある人は彼のマスターから引き継ぎ、代わりに伝法することができず、それができない人もいます。それは修行と関係があるのです。印心を受けた後、すぐに完全な仏陀になったわけではありません。仏陀には間違いないです。印心を受ける前から、もともと仏陀でした。印心を受けたから、仏陀になったのでありません。ただ、みなさんはこのことを知らないのです、自分が仏陀であることが分からないから、印心が必要なのです。印心後、すぐに多くの体験をすることはできませんが、少し悟りが開くことができます。悟りが大きい人も悟りが小さい人もいます。けれども、まだ修行を続けなければ

ばなりません。修行すればするほど自分の本性を認識し、自分の本来の姿がわかるようになります。

例えば、ある所に王子がいたとします。小さい頃に宮殿を離れ、物乞いに連れて行かれて、大人になるまで育てられたとします。彼は自分が王子であることは知らず、毎日、物乞いに行きます。国王は毎日王子のことを思い、彼を探しに人を派遣しました。王子の体には特徴があつて、それを頼りに探し出すことができます。ある日派遣された人は王子を見つけました。王子に「あなたはもともと物乞いではありません。私の話をよく聞いてください。私と一緒に宮殿に帰って将来国王になるのです」と言いました。王子は物乞いの家庭で育てられ、物乞いの生活に慣れていたので、すぐに役人の話を信用するのは不可能です。そこでその役人は毎日のように、王子に「私はあなたが王子であることを保証します。あなたが証明して欲しいなら、証明して見せます。この服を着たいと思うなら、すぐに着せてあげます。この馬に乗りたければ、すぐに乗せてあげます。問題ありません」と言いました。

けれども、王子は物乞いの生活にすでに慣れていたので、自分が王子であることを認める勇氣がありませんでした。毎日、「自分には無理です」と言いました。役人は辛抱強く説得し続け、「宮殿には真珠や宝物がたくさんあり、豪華な宮殿もあり、そういったものはすべてあなたのものです」と言いました。けれども、王子は小さい時から物乞いの家庭で育ち、自分がそん

なにかくさんのものを持ってることが想像できませんでした。

その役人は彼を王子にしたわけではありません。彼はもともと王子だからです。話し続けている日、物乞いは信じて、「いいでしょう。あなたに私の生活を世話してもらい、私のすべての面倒を見てもらって、本当かうそか試してみましよう」と言い、王子の服を着て馬を乗りました。大勢の部下が王子に礼拝しました。この時、彼は少し信じられるようになりましたが、すべてを信じてはいませんでした。役人もまだ「どうすれば、王子を宮殿に連れて帰ることができるとか」と、悩んでいました。宮殿に連れ戻った後、まだ宮殿の生活や、高尚な礼儀、高貴な態度に慣れるまで長い間、訓練をしなければなりません。彼はそれまで卑しい物乞いの生活を送っていたので、頭を上げて人を見ることができませんでした。しかし、今は前と違って王子になったので、振る舞いや智慧など、多くのことを学ばなければならなかったのです。

同様に、私たちは本来すでに仏陀です。けれども、世々代々魔のパワーにコントロールされ、苦しみが多く、悩みやカルマも多く、それに縛られ、生活も困難ばかりです。今日は少し良くなったとしても、明日はまた困ったことが起きて、明後日は少しよくなっても、明々後日はまた難しいことが起きるのです。いつも苦しいことに会いますが、なぜなのかわかっていません。ご飯もそんなに食べていません。毎日せいぜい三、四杯で、衣服も二、三枚しかありません。しかし仕事はいつも忙しく、朝から晩までやってもやりきれないほどで、いつも時間に追われ

ていますが、なぜこんなに苦しいのかわかりません。

もしマスターや、仏陀や菩薩の化身がこの世界に來たとしたら、彼らは私たちの苦しみを見ただからです。私たちは本来彼らの友達なので、彼らは私たちを救いに來たのです。しかし、私たちが元々高尚な仏性を持っていることを、短時間で分からせることができないため、彼らは多くの励ましの言葉を使って「あなたはもともと高貴なのだ。あなたは仏陀だ」と繰り返し、話していると、私たちはやつとすこし聞き入れるかもしれない。そして、彼らはまた辛抱強く、私たちに「私のそばに来てください。私があなたの仏性を見つける方法を教えます。あなたは本当に仏陀であり、菩薩であり、間違いなく仏性を備えています。あなた自身の本来の面目を見せてあげます」と言います。みなさんはだんだん信じるようになって、印心を受けるのです。印心後に初めて自分のことを少しわかるようになりますが、それでも、毎日のようにみなさんを励まし、みなさんが自分の高貴な品性をより多く知るように、依然として、まだたくさん教えなければなりません。

たとえ王子が宮廷に戻ろうとしても、宮廷までは遠いので、途中で王子は「私は信じない。国王に会う勇氣がない。どうしてそんなことができるのだろうか。私はもともと物乞いで何十年も物乞いなのに、どうやっていきなり王子になれるものか」と言うかもしれません。彼はもう歩きたくないので、戻って前の物乞い生活を続けたいと思っているかもしれません。二、三

十年間の間、毎日、人に抑圧され、臭くて友達はなく、世話してくれる人も、かわいがってくれる人もいなかったからかも知れません。ですから、どうして彼にその勇氣を持てるのでしょうか。短時間の訓練で彼を高貴な国王にすることも、彼の観念を変えすることも不可能です。みなさんは想像できますか。物乞いから国王に変わることは簡単ではありません。

ですから昔から今日まで、大禪師が現れて人に教え、衆生を救うことは生易しいことではありません。彼らは私たちの習慣と戦い、私たちが執着している観念と論争し、闘わなければなりません。というのは、大師がこの世に現れても、すべての人が彼の教えを聞きに来るわけではありません。ある人は聞いても信じないばかりか、帰ってから中傷したりします。そのような人や教理を聞くとうしない人は自分の観念しか信じない人です。古代においては、彼らは大師が話す真理を信じないで、火の神、太陽神、風神などを崇拜したのです。これは古代の信仰です。彼らは自分の本来の面目を見失ったため、とても怖がるのです。保護のパワーが断たれたため孤独を感じ、すべてが怖いのです。なぜ太陽があんなに熱いのか。なぜ物は火で燃やされてしまうのか。なぜ山はあんなに高いのか。海はこんなに深くて広くて、対岸も見えないのか。なぜ風はあんなに強いのか。物を壊し、木を根こそぎ引き抜き、建物を吹き倒すのか。風を恐れ、水を恐れ、火を恐れ、太陽を恐れるのです。このような自然現象を恐れることから、盲目的に信仰するのです。

人間は自分の本来の面目である、大きなパワーと断たれると、とても恐くなり、孤独に感じます。まるで子どもが道に迷つて、家が見つからないかのように、父母や兄弟との関係が切れちゃまい、一人ぼつちで恐くなるようなものです。迷信的になつて亡霊に拝んだり、鬼神を拝んだり、全く論理的でないことをするので。昔も今も同じです。ですから、大師が現れたとき、そのような迷信的な観念と猛烈に闘わなければなりません。しばらく経つと、そのような観念は少し変わりますが、他人を中傷する人や迷信的な人を変えることは容易なことではありません。けれどもそういう人たちも救わなければなりません。教理を信じる人は比較的簡単に変わります。

迷信的な観念を変えるのは銃で戦うのではなく、思想的な戦いは本物の戦いより激しく、もっと大変です。ですから、衆生を救うことは難しいとよく言われていますが、衆生を救うことが難しいのではなく、頭脳を救うことが難しいのです。というのは、この頭脳はもともと私たちのものではありません。普通の仕事をしている時は、頭脳はよく協力しますが、解脱の話になると、私たちを邪魔したり、反対したりして、決して自由にはさせてくれないのです。そして頭脳は「解脱してどうするのですか。ここの生活するのはいいじゃない。食べ物もあるし、着る服もあるし、夫や妻もいる。メイデーションしてどうするの。解脱してどこへ行くの。」この世界は最も綺麗で、上に他の境界（きょうがい）があるなんてわからない。天国は本当に

あるの。それともないの。このマスターは人を騙しているのではないか」といろいろと疑うのです。

ですから、過去の禪師や有名な師はよく弟子にテストをしました。なぜテストをするのでしょうか。弟子の頭脳を慣れさせるためです。まず古い習慣をきれいに洗えば、新しい種を播けます。山の上にある私たちのセンターと同じで、私たちが山に行く前は住む人がいないので雑草が伸びて、道も見つかりません。どこも雑草ばかりでした。それで私たちが行つてから、まず雑草を刈り取らなければなりません。刈り取った後も雑草はまた生えてきます。あまりにも伸びていて完全には刈り取れないので、私たちは少しずつ刈り取り、雑草が短くなったら、鋤で根元から掘り起こしました。今はもう雑草はありません。整地した土地を準備して肥料を施した後、野菜の種を播きました。今野菜が大きくなって、もう食べられます。

同様に何か新しい思想、または真理を伝える場合、まず先入観を取り除かなければなりません。真理と先入観は共存できません。野菜の栽培と同じで雑草と一緒に栽培できません。雑草があまりにも多いと、入って行くことさえできないのに、どうやって野菜を植えるのでしょうか。野菜を植えた後、毎日に世話をしなければなりません。虫がついたり、草が伸びたりするかもしれません。草は地上から生えるだけではなく、空からも落ちて来ます。風がどこからか草の種が運んで来て、菜園に落とすのです。二日間世話しないと雑草が伸びてしまいます。

ですから、印心後は続けて修行しなければなりません。私もまた、毎日のように経の講義に行く必要があります。毎日ではなくても週に二、三回、あるいは三日間リトリート、七日間リトリートを行わなければなりません。こういうことが必要なのです。そうでないと、弟子は自分を失ってしまいます。

というのは、この社会には非常に大きな誘惑の力があるからです。この世界では魔のパワーが大きいのです。というのは、この世界は魔の世界であり、彼の国であり、彼の領土なので、仏陀や菩薩が高い境界（きょうがい）からここにやって来て、彼の領土に介入すると、彼はうれしくないのです。なぜなら、仏陀や菩薩は降りて来て、住民を上に入れて行き、高貴な人に変えるからです。もともと魔の奴隷である人が、今、魔より高い地位になり、しかももう、この世界に戻って来て苦しみを受けることはありません。このようにして魔は一つの靈魂を失うのです。一人多く解脱すれば三界以下の衆生が一人少なくなります。それで魔はうれしくないのです。

ご覧なさい。昔から今日まで、真の大師が人を救うためにこの世界に来ましたが、いつもとても多くの困難に出会い、すべての衆生を救うことはできませんでした。一部の人たちを救えたとしても、とても多くの災難に会いました。

神秀（じんしゅう）の弟子も仏教徒で出家者でしたが、慧能大師を誹謗し、加害したのです。

釈迦牟尼仏も出現したときに多くの人に誹謗されました。ある人は妊娠を装い、釈迦牟尼仏に無実の罪を着せようとなりました。ある人は釈迦牟尼仏を殺そうとしたり、ある人は彼のことを邪道だと言ったりしました。イエス・キリストは出現して何年もしないうちに、殺されてしまいました。孔子は衛国（週時代の国名）で、足跡を消されてしまいました。老子は彼を信じる人がいませんでした。いたとしても少なかったのです。現在、老子は二千年前より有名ですが、彼の生存中は知っている人はいませんでした。死んでから有名になったのです。

なぜ昔の師は現在の師より有名なのでしょう。それは一人の師がこの世から離れた後、魔がすぐに彼の名前を利用して悪事をするので、師の真理を魔理（魔の道理）に変えてしまうからです。ご存じのように、一人の大師がこの世界に来て、真理だけを教えるのですが、時間が経つにつれ、それが迷信になってしまふのです。

例えば、老子はもともと彼に供え物をして、拝むことや何か物を供えたり、拝んだり、動物を殺して供えることを教えていません。彼は自分は何々を加持すると言うような事は言っていない。自分が死んだ後、供え物をしなければならぬとは言っていない。道徳教は「道（タオ）」を探さなければならぬ、この「道」とつながり、この「道」と一緒にいければ、私たちは真理を見つげることができるということを人に教えています。これは道徳教の重なる主旨であり、真理であり、高い思想です。

けれども、現在の道教はどのように変ったか知っていますか。道教の寺では豚を殺し、牛を殺し、鶏を殺して供えています。私にはそれを誰に供えるのか全くわかりません。老子も恐くてとつくに逃げてしまったでしょう。彼は本来大師ですが、どうしてそんなにたくさんの肉を食べるといふのでしょうか。孔子も同じです。もともと学者になりたいなら、道徳的でなくてはなりません。しかし、今の孔子を信仰している人たちは牛や多く動物の肉を供えています。仏教もほとんど同じです。現在多くの国が小乗仏教になり、多くの国の出家者は肉を食べ、結婚する人も少なくありません。末法時代にはなんでもめちやくちやなことができるのです。

中国大陸は何千年の伝統を持つ国であり、文化や道徳を重んじる歴史が長く、仏教が大陸に伝わった後、大きく発展しました。困難な時期もありましたが。かつては燦然と輝いていました。けれども最終的には滅亡に近い状況に陥りました。今は私たちのこの小さなさつまいもの形のフォルモサの地にだけ、本当の伝統的な仏教がまだ残っています。出家者は結婚してはいけない、肉を食べてはいけない、酒を飲んではいけないのです。もし、フォルモサ（台湾）もそうでなくなったら、本当の仏教伝統を守っている所がどこにあるのか、私はわかりません。けれども、フォルモサも本当の仏教ではありません。仏教と道教とが融合して、変形した仏教になっています。昔のインドの仏教では、朝晩のお勤めはありません。今はどこでも朝晩のお勤めは毎日の日課になっています。本来念仏で十分なのに、今はいろんなものを唱えています。

す。これは間違いとは言えませんが、しかし、朝晩のお勤めはもともと出家者だけがするものでした。

オウラック（ベトナム）では、以前も今も、在家者は楞嚴呪（りようごんじゆ）、準提呪（じゆんていじゆ）、あるいは他の呪文を絶対に唱えてはいけません。私は出家する前、すでに菜食し、修行していました。毎日念仏し、仏像を拜んで経を読んでいましたが、私のマスターが楞嚴呪を唱えることを許しませんでした。朝晩のお勤めも許されていませんでした。それが許されたのは、だいぶん後になってからのことです。彼は私に「在家者は夫婦の生活があるのと、家の雰囲気は寺と違うので、唱えても感応がないだけでなく、問題が生じる可能性がある。在家のものはまだきれいになってないので、唱えても感応が得にくく、しかも亡霊に邪魔されることがあるからだ」と言いました。

今はみんなが好き勝手にやっています。ある人は自分で仏像を買に行き、釈迦牟尼仏か、また他の仏像を買って帰った後、毎日拜んで朝晩のお勤めをし、わけのわからない符水（ふすい：護符を焼いて、その灰の粉を入れた水）を人々に飲ませるのです。第一に彼らは飲めません。第二に、もし飲めたとしたら、その後毎日飲みに来ます。このようにもつとたくさんの亡霊を招き入れるので、墓場の雰囲気になってしまいます。私たちには亡霊をコントロールする力はありません。そこで唱え終わった後、精神が不安定になり、ある人は精神病になったりし

ます。

私は多くの例を見て知っています。多くの人が私に助けを求めに来ました。助けるときもありませんが、かかわらない時もあります。というのは、あまりにもひどく、それをなおすには余りにも多くの時間が必要だからです。そういう人は自分から他人の因縁に介入し、大菩薩になったつもりで人を救おうとするからです。それなら、自分で自分を救ってもらいます。私はそんなことにかかわりません。大変煩わしいです。このような人を救うことは、多くの時間とパワーを浪費することになります。最も良いのは私がこのパワーを保持して、より多くの人々を救い、彼らを早く解脱させることです。一人を救うために百人を放っておくことは、パワーを浪費にすることで不公平です。

フォルモサにはこのようなケースがたくさんあります。朝晩のお勤め用の経本を持ち帰っては好きなように唱え、唱えた後は手印を習いに行き、そうすると、餓鬼を救えると思い込んでいます。あるいは七日間念仏、七日間座禅に参加した後は、家に帰って自分でまねをしてやるのです。または寺で二、三日拝み、少しばかりのことを学んでは家に帰った後、自ら師になつて人に教えたりします。寺の雰囲気は家とは違っています。家でやるには十分なパワーがなくてはなりません。例えば亡霊に物を供えて、呼び寄せるにしても、彼らをコントロールできる十分なパワーが必要です。自分の精神が侵されないようにしなければなりません。フォルモ

サには衆生を救うことをする人が多いです。私は至る所で、「衆生を救わなければならない」という言葉をよく聞きます。その想いはいいのですが、実際にできるかどうかは別問題です。

六祖壇経（ろくそだんきょう）か金剛経（こんごうきょう）を買って来て家で読んで、座禅がよいと書いているのを見つけ、自分もまねをして座禅します。寺に行つて、出家者が座禅をしているのを見て、自分もまねをして家で座禅をします。これは座禅と言えますか。これはまったくの勘違いです。間違つた座禅をすると間違いを犯し、間違つた道を歩くと多くの問題が生じます。だから多くの人はまねしたため精神がおかしくなっています。それは教えを公に宣伝しすぎたからです。公開できるものできないものがあります。あまり公開しすぎると、人が勝手にまねするので、問題が生じても対応できず、結局は彼らを害したことになります。

ですから、昔の大師は法門を伝える時は非常に慎重でした。まずは「準弟子」にして多くのテストをして、長い間、十分観察してから法門を伝えました。このほうが安全で、弟子も外でいいかげんな批判したりしません。

衆生を救う呪文を唱えると二種類の状況が生じます。一つは長い間呪文を唱えているうちに、精神病になることです。二つ目は、呪文を唱えた後も前と同じように正常です。精神病になる人は福報がないからです。エゴが強く「私」はこんなに良い人で、「私」にはこんなに慈悲の心があり、「私」は衆生を救い、「私」は呪文を唱えて衆生を救うことができ、「私」は毎日餓鬼に

布施しますなどです。エゴがあまりに大きいので、「私」は精神病になるのです。念仏の後、自分が人より高いと感じ、傲慢な心が生まれると、魔の障害が出て来きます。本来魔は悪いパワーに属しますが、しかし、魔も悪い人は好きではありません。それで、そういう人たちの頭脳を混乱させるのです。

二つ目の状況は、死ぬまで念仏していても精神病になりません。どうしてでしょう。それは、こういう人は前世でよく修行し、福報が大きいのです。しかし、まだ修行が足りないのです。またこの世に戻って来たのですが、やはり夫か妻がいて相変わらず世俗に縛られています。けれども、前世で修行したので福報があるのです。

本当に慈悲の心を持ち、心から人を救いたいと思い、傲慢でなく、真心で餓鬼に布施したいと思い、朝晩のお勤めをし、死んだ靈魂を救いたいと思う、そういう人もいないわけではありません。もし彼らが本心から衆生を救いたいなら、魔もそうさせますし、仏陀や菩薩もかわりません。けれども、その人は人を救うことに勤しみ、自分は修行していませんので、死ぬ時には前世の功德をことごとく使い果たしたため、死んだら何もありません。それで低い境界（きょうがい）に生まれ変わる可能性が大きいです。生前は何にも問題はなかったのですが、功德は全部失ってしまったのです。私たちには見えないので、この状況がわからないだけです。

これには二つの状況があります。一つ目は、それほど金を持っていない人がいて、彼は自分

はお金持ちだと装い、毎日毎日お金を借りて他の貧しい人にあげたとします。ただ有名になりたいためにお金をあげすぎて、借りたお金を返済できず、警察につかまり、刑務所に入れられたケースです。二つ目の状況は、本当に貧しい人に布施したいと思う人です。しかし、自分は仕事がなく、親の財産を受け継いだので、毎日少しずつそれを人々に与え、最後に何にも残っていないというケースです。

同様に、福報もお金と同じようになくなります。ですから、私たちが修行するなら、この無量無辺の功德を見つけないければなりません。無量無辺の功德のあることをしなければなりません。そのためには、無量無辺の福報に頼らなければなりません。どのように無量無辺の福報を見つかるのか知るべきです。それを見つければ、人に何を与えても問題ありません。けれども、無量無辺の福報を見つける前に、無茶なことをしないでください。とても危険です。

この無量無辺の福報には源があり、この源を見つけて、この源と繋がれば、私たちには何でも手に入り、すべてが満ち足り、人にあげても問題がありません。

ですから、私が言ったように、私たちがこの無量無辺の福報の源を見つければ、この福報を無限に布施することができ、しかも自分自身を傷つけることはありません。ただし、この福報の源を見つけた人は読経したり、法会で念仏したり、鐘などをたたいたりしません。必要がないからです。これらは魔のやり方で、釈迦牟尼仏が教えたことではありません。イエス・キリ

ストも人にこのようなことを教えていません。なぜ、呪文を唱えるのでしょうか。本来このようなことはありませんでした。仏教と他の迷信的な信仰との結合によって、現在こんなふうになったのです。これは仏教が別の国に伝わったのと同じで、もう純粹な仏教ではありません。

本当の仏教徒はそんなことをする必要はありません。本来の面目を本当に見付けた人もそんなことする必要はありません。慧能大師が朝晩のお勤めをするとか、衆生を救うなどと聞いたことがありますか。菩提達磨が何かするのを見たことがありますか。彼はただ壁に向かって座禅していただけです。百丈法師も同じで、彼が読経や法会を開いたことがありますか。ありません。私も釈迦牟尼仏が朝晩のお勤めをし、または外面の形式的な事をしたと聞いたことはありません。

もし、釈迦牟尼仏がそういうことをしたとしても、彼にはパワーがあるのでできます。私にはできません。私たちは仏陀になつていないのですから、こういうことをしても、何の役に立つというのでしょうか。本来仏陀もそんなことはしません。ただどこかに座つていれば、たくさんのお勤めをすることができました。わざわざ特別な場所に行かなくても、呪文を唱えなくてもできたのです。彼は何かを唱えたとしても、ただ心の中で唱えるだけでした。彼が何をするにしても、パワーで、または化身でします。ですから、私たちは釈迦牟尼仏が何千億の化身を持つていふと言ふのです。彼は手を動かす必要は全くありません。

みなさんに言うておきますが、私はどこにも行かないし、どこからも来ません。けれども、ある人は私が彼の代わりに仕事したり、手伝ったりするのを見ました。私は決して山から降りて手伝いに行ったものではありません。今日、私はここに講演に来ました。本物の私が講演に来たのです。もしみなさんが今、私をたたいたら、私のこの肉体は痛みを感じます。けれども時には、この肉体で仕事をするのではなくて化身でします。

ですから、本来の面目を見つけた時は、私は「成就した」と言います。手を動かす必要はありません。その時こそ、本当に衆生を救うことができます。しかも、衆生を救うことを考えることはありません。なぜなら、救われる衆生などはいないからです。その時は、「私」と「衆生」といった区別する心はまったくありません。何も考えず、すべて自然にしているのです。ですから、老子の言う「為無為（何もしない行為）」とはこの意味です。つまり「做而不做、為而不為（しているけれどしていない）」のです。

先ほど、私は言いました。マスターが往生したら、生きている時より有名になります。それは魔がマスターの名前を利用して破壊の計画を進めて、一つの宗教を作っては偽の真理を用いて、衆生にそれこそ仏教であると思わせるのです。その結果、また輪廻を繰り返し、相変わらず魔の住民のままです。それで喜んでいるのです。魔は私たちの心を慰めてくれる宗教を作って、私たちの真理に対する渴望を利用するのです。

なぜなら、多くの人が真理を求めています。どうやって探せばいいのか、どこに行って探せばいいのかわかりません。ですから、誰かに仏陀を拜めば解脱できると教えられると、とても喜んで聞きます。というのは、釈迦牟尼仏は二千年経つても、まだ有名だからです。彼に頼らないで、誰に頼ればいいのかでしょう。喜んで仏陀を拜みに行き、解脱できると思っています。

これはすべて魔の策略です。魔は私たちが内面の仏陀を探すことを邪魔し、私たちに外に向けて仏陀を探すよう仕向け、無茶苦茶なことをさせるのです。私たちはそれらをやらされて満足しているのです。「自分は本当に求道心がある人だ。私は毎日朝晩のお勤めをしている。私は修行ができています」と思うのです。しかし、これらはいずれも魔の策略で、みな三界以下のやり方であることを知りません。このようなやり方では一千億年が経つても解脱できません。

福報があつて誠心誠意な人でも、せいぜい第二界までしか到達できません。第三界以上は言うまでもなく、第三界にも到達できません。第二界はまだ魔の国で、第三界もやはり魔の範囲内です。というのは、この世界は三界以下のパワーで造られたのです。私たちの体や頭脳は三界以下で造られたのです。三界以上では体はなく、頭脳もなく、目、耳、鼻、舌、身、意はまったく使いません。この世界では私たちが多くの道具を使っています。道具が多ければ多いほど面倒です。頭脳はないほうがいいのですが、この世界では体や頭脳を使わなければなりません。この肉体がなければ私たちは生存できないのです。

ですから、衆生を救い、呪文を唱えて多くの衆生や亡霊を救いたければ、まず仏陀にならなければなりません。まず、自分の仏性を見つけ、大きなパワー、根源のパワー、本来の面目、「道（タオ）」を見つければ、仏陀と同じように衆生を救うことができます。なかには「ある呪文はパワーがある。ある人の手印はパワーがある」などという人がいるかも知れません。そこで真似をしても、結局、何の役にも立ちません。

ですから、本当の大師はこんなでたらめなものを教えません。彼らは私たちに、まず私たちの本来の面目、自分の仏性を見つけることを教えます。その後何をするのかは自分自身の問題です。仏陀のパワーを持った後は、どんなこともできます。どんな人でも救うことができ、どこであろうと、化身（けしん）で衆生を救うこともできます。決してそんなに大変なことではありません。毎日二時間ずつ朝晩のお勤めをしたり、また手印をしたりするのは何の役にも立ちません。自分を傷つけるだけです。東奔西走して本当に修行する時間がなくなり、自分の本来の面目や、自分の仏性を探す時間がなくなるのです。パワーを浪費して、前世の福報を無駄にして、最後には何もなくなつて、「空っぽ」になり、また生死を輪廻し、魔になつたり、亡霊になつたり、動物になつたり、愚かな人になつたり、貧しい人になつたりします。それではあまりに哀れではありませんか。

この肉体があるうちに、早く修行すべきです。仏陀になつたら、無限の衆生、ガンジス河の

砂の数ほど多くの衆生を救うことができます。一つ団体の靈魂や小さい団体を救うだけではなく、すべての天、亡霊、天人、人も救うことができます。ですから「天人導師、四生慈父（天と人の師であり、四生（胎生・卵生・湿生・化生：生物すべて）の父である）」と言います。

これは私が前に話した、王子の話と同じです。例えば、役人が王子に少しのお金と、着る服と、乗る馬一頭をあげたとします。しかし、王子はそれを受け取ろうとしません。少しのお金ですが、それも馬も全部人々に分けてしまったのです。しかし王子はそのお金を使い、その服を着て、馬に乗って初めて自分の宮殿に帰り、後には国王になり、そうすれば宮殿にはたくさん金があるので、多くの人々にあげても全く問題がない、と言うことにまでは考え付かなかったのです。

役人が来たときには、たくさんのお金を持ってきませんでした。ただ一、二枚の服と、いくらかのお金を持って来ただけです。そこから宮殿までの道中は、まずこのお金を使えばいいのです。これは決して王子が利己的で他人のことを構わないのではなく、まずこれを使って宮殿に帰るべきです。帰った後はいくらでも人々に施しできます。ですから、この頭脳で考えないことです。また、あまり人の話ばかり聞かないことです。人がやっているのを見てまねをしないことです。そのことは何の役に立つかどうか、どれくらい役に立つか。その効果は有限か無限か、どうしたら最大の効果が得られて、障害が最も少なくなるか、をよく考えなければなり

ません。

私は出家する前、多くの人を手助けしました。これは誇張して話しているではありません。当時、オウラック（ベトナム）の人は多くの困難に直面していました。彼らはドイツに来たばかりで、ドイツ語を話せる人はいませんでした。英語、フランス語は話せる人がいましたが、ドイツ語ができる人は少なかったのです。私は彼らの通訳で忙しくて、毎日朝七時から夜十一時まで、時にはご飯を食べる時間もなく、歩きながらパンを食べたりしていました。その時、私は本当に自分のことを忘れて、すべて彼らのためにしていました。ある時、頭痛がひどかったのですが、彼らは歯が痛い、お腹が痛いと言うので、私は自分の痛みをこらえて、彼らを医者者に連れて行きました。私は自分の頭痛のことを忘れてしまい、時間がないので、医者からもらったアスピリンも飲み忘れしました。夢中に人を世話するうちに頭痛も治ってしまいました。時には一日中何も食わず、とても苦しかったのです。その前、私は出家したかったのですが、当時難民が多くて、出家しても役に立たないと思い、毎日の念仏をして自分で修行していましたが、彼らにはあまり助けにはなっていませんでした。やはり難民たちに直接かわって助けた方が役に立ちました。その時、私はまだ長い目でものを見ることができなく、目の前の困難な人、助けを求める人しか見えませんでした。ですから、朝から晩まで忙しくて、当時は経典を読む時間もなく、助ければ助けるほど、もっと多くの困難な人がやって来しました。

その後、赤十字で仕事をした時は、もっとたくさん不幸な被災民がいて、オウラック人だけではなく、アフリカ人、アフガニスタン人などもいました。国際的な事情で、ますます多くの人が来るようになりました。その時、私はこれらのすべての人たちを助けられなかったら、どうしようと思いました。その時、釈迦牟尼仏を思い出しました。彼は「出家は最大の功德であり、仏陀になることができる。仏陀になったら、より多くの衆生を助けることができる。一人の凡人のパワーは限りがあり、多くの人を助けることはできない」と言っています。その時、私は出家を決意しました。

しかし、たくさんのお寺をまわっているうちに、出家してもたいして意味がないと思いました。毎日朝晩のお勤めや、手印、頭印、足印ばかりです。(笑い) また亡霊が来て、供え物を食べているのも見るのがなく、衆生にとって、なんの利益があるのか見えてきませんでした。これらの朝晩のお勤めは、私が小さい時にすでに学びました。たくさん経も読みました。小さい頃から仏教の経典を読み始めました。このままにしても意味がありません。楞嚴経(りょうおんきょう)には、仏陀の弟子には多くの体験があると書かれています。法華経には仏陀は多くの境界(きょうがい)について述べていると書かれています。「何か音を聞くことができる。菩薩の修行をすると多くの妙なる音が聞こえる。梵天の音もあり、目で梵天を見ることができ、何か光を見ることができ」と書かれています。私は今まで修行して来ましたが、なぜ何も見

えないのでしよう。何も聞こえないのでしよう。

私は不満でした。このままではいけないと思いました。それで、私は「マスター」を探すことを決意しました。私は少しでもいいから、必ず仏陀が言っている光と境界（きょうがい）を見たい、仏陀の言っている音も聞きたいと思いました。私は貪欲ではなく、すぐに仏陀になりたいとか、すぐに宇宙のすべてを見たいなどというのではなく、ほんの少しだけでも、仏教經典上の体験が得られれば、自分を安心させられ、この道は正しい道であり、この道に沿って行きさえすれば、必ず家に戻れることを確認したかったです。

証明できるものが見えなければ、この道は本当に家路へと向かうのか、それとも外道なのか、私にはわかりません。家路への途中には特別な「印」があるはずです。例えば、このお寺の本堂の外には大きな橋があります。それが「印」となって、それを見れば本堂に近いことがわかります。

けれども、私には楞嚴經に書いてある体験がありません。法華經に述べられている体験もありません。普門品（ふもんぼん：観音經のこと）には、観音菩薩を唱えれば、「火の中に落ちて、焼かれぬ」と書いてあります。みなさん、マッチで火をつけ、炎の上に指をおいて、観音菩薩を唱えてみてください。焼けるかどうか見てみましょう。指だけでいいですよ。手を燃やさないでください。焼けてしまいますよ。その時、私は「これはいけない、人を騙してはい

けない」と思ったのです。私は本当に体験が欲しかったのですが、方法がありませんでした。私は以前水泳ができませんでしたが、普門品に「観音菩薩を唱えれば、水に落ちても浮かんでくる」と書かれているのを見て、水に飛びこんでみました。沈んでしまいました。その時、もし助けてくれる人がいなければ、私は死んでいたでしょう。

これではいけないと、私は言いました。少しでも証明できるものがないと、私は修行を続けることができません。少しでも私に信じてことができるような体験が欲しかったのです。もし何もなくても往生の時にあって、阿弥陀仏が迎えに来てくれれば良いけれども、万一、阿弥陀仏が来なかつたら、私はどうすればいいのでしょうか。私は今すぐ少しのお金が欲しかったのです。もし今もらえなければ、たとえ死の時に社長から一億円をもらっても役に立ちませんし、もらえないかもしれません。

ですから、その時マスターを探しに出かけました。マスターが見付かれば、本当の体験を得られるかもしれないし、経典に載っている体験を私も得られると思いました。もちろん一日ですべてを体験ができるわけではありません。少しでも良かったのです。というのは、修行には長い時間が必要です。決して一日ですぐに仏陀になることはありません。釈迦牟尼仏も六年修行しました。ですから、少しでも何か証明あれば、私たちは安心するでしょう。私たちは決してこの体験があるから幸せなのではなく、この体験の後は、私たちのレベルが高まり、幸せな

レベルになるからです。私たちはその体験によって変るのです。

まるで役人が王子を見つけたように、その時、王子の心はまだそれほど変っていないかもしれませんが、外見は明らかに変わりました。良い服を着て、お金もあり、馬にも乗れ、奉仕する人も多く、すべて以前と違います。宮殿に帰ったらどのように変身するか、みなさんは分かるはずです。

ですから、少なくとも私たちに、王子のような服を着させて、お金を少し持たせなければなりません。さもないと死んでから、王子になって何の役にも立ちません。しかもその時になってみると、自分が王子であるかどうかもわかりません。

私はすでに幸せな状況を見つけたので、みんなに分けてあげたいのです。通知に来た役人は国王ではありません。彼はみなさんを王子にすることできません、彼はただみなさんに知らせるだけです。みなさんは王子であると告げるだけです。自分の宮殿を探して、帰ったら国王になるのです。私と一緒に学ぶのも同じことです。私の責任はみなさんに知らせることです。ですから、私の外見や行動や、食事をする時どんなふうなのか、話が上手かどうかを気にする必要はありません。これはみなさんの国とは関係ありません。みなさんが国王であっても無関係です。みなさんの社会的地位とも無関係です。私がみなさんに言いたいのは、みなさん自身の本来の地位は高く、この世界で最も高貴であるということです。もし自分本来の地位を見つけ

たいなら、私はみなさんを案内できます。

ですから、マスターに学ぶ時、マスターの行動を評判してはいけません。外見を見てはいけません。何をしているのかを見てはいけません。マスターはただ派遣された役人のようなものです。みなさんを連れて帰り、みなさんの本来の地位に戻らせるのです。みなさんはただマスターについて行けばいいのです。他のことを気にしてはいけません。マスターが着ている服はきれいかどうか、歩くのが速いか遅いか、これはみなさんと関係ありません。みなさんはただマスターについて行けばいいのです。

けれども、ほとんどの人は思い違いをしています。マスターを探して、マスターの外見だけを見て、厳粛でないと学ぼうとせず、女性のマスターには学ぼうとせず、男性のマスターにだけ学ぼうとするのです。または女性のマスターは体が小さいので気に入らず、中国語が下手だからいやだ、彼女は短気で怒りっぽく、自分に合わせてくれないから嫌いだなどと言うのです。それらはいずれも、マスターの本来の面目とは関係ありません、マスターの言うことを聞かなくても、マスターは決して気にしません。

というのは、そういうマスターは人に教える前に、すでにその道は平坦ではないことを知っているからです。衆生を救うのは難しく、多くの困難があることを知っていても、マスターは世々代々やって来て衆生を救います。なぜなら、衆生は親族だからです。たとえ私たちの両親

や兄弟が過ちを犯したとしても、やはり私たちの親族です。私たちは相変わらず彼らを愛し、助けて救うのです。そうでしょう。もし家にいたずらっ子がいて、いつも怒っていて、言うことを聞かないからと言って、私たちは彼を川の中などにほうり投げますか。そんなことをしますか。するわけがないです。やはり毎日世話をし、ご飯を食べさせ、お腹がすいたらすぐに物を食べさせ、服がなければすぐに持って来て着せます。彼は私たちに怒るかもしれませんが、嫌な気持ちになっても、私たちは次の日またいつものように彼の世話をします。

この社会には、甘い言葉で話をする人たちがたくさんいます。とても礼儀正しく、温和に振舞いますが、果たしてその人は、私たちの本来の面目を見つげるための手助けをしてくれるでしょうか。いいえ、できません。甘い話や礼儀正しい話は修行とは関係ありません。私たちは人の外見を見てはいけません。このマスターが良いとか悪いとかの批評は、すべて私たちのカルマによるものです。たとえ、それがみなさんのカルマによるものでないとしても、それはマスターの個性です。マスターはみなさん一人か二人のために個性を変えたりしません。もし変えてしまえば、ある人には好まれますが、他の人に好まれない可能性があります。そうなったら、どうすればいいのでしょうか。一人ひとりすべてに気に行ってもらうことは不可能です。そうでしょう。

ですから、衆生を救うのは確かに難しいことです。彼らのさまざまな習慣や好みと戦わなけ

ればなりません。マスターの黄色の服を着た姿が好きなら、赤い服や、緑色の服が好きな人もいます。そこで、たくさん服を買って来て、私に着せようと思います。着ないと彼らは気分が害されてしまいます。私に食べ物を買って来てくれて、私が食べないと、彼らは自分たちが嫌いなのではないかと思うのです。修行にはこのような執着は必要ありません。多くの人はカルマが非常に重く、私と一緒にしばらく学ぶと、私の個性が彼の好みと合わないということで、離れて行ってしまいます。これはその人にとっては不利益なことです。私はどうすればいいでしょう。一人の人がどうやってすべての人に合わせるができるのでしょうか。

動物に対しても同じ様なことが言えます。ある人は小鳥が好きですが、他の人は小鳥が大嫌いで、毎日小鳥が鳴いていると、その人は毒薬を飲ませて、小鳥の口を塞ごうとします。しかし、飼い主は小鳥が好きでなりません。ですから、これはどうしようもないことです。みなさんは修行したいなら、本当に自分で修行しなければなりません。マスターの外見を見てはいけません。マスターはただの指導者で、「道（タオ）」ではありません。この体、この頭脳、この世界、この社会はこうなのです。変えることはできません。

あなたが真のマスターを探し出したら、自分が努力してメデイーションすべきです。しばらくすると、内面のマスターが現れ、高い境界（きょうがい）に連れて行ってきて、本当の真理を学ばせてくれます。これこそ真のマスターです。もし真理を認識すると、この社会のさ

さまざまな観念や伝統に縛られません。長く修行すると、内面に自分自身のマスターが見えます。その時、この内面のマスターはあなた一人だけに向き合います。この世界ではマスターはまだこの肉体を使って、衆生を教え導かなければなりません。ですから、マスターによって個性も違うのです。あなた一人のためだけに、特別にあなたの好みに合わせることはできません。

釈迦牟尼仏もすべての衆生の好みに合わせることはできませんでした。イエス・キリストも同じです。だから十字架にはりつけられました。もし誰もが偉大なイエス・キリストを好きなら、彼は十字架にはりつけられて死ぬことはなかったでしょう。彼は大きな神通力（超能力）があり、多くの非常に不思議なことをしました。病気を治し、死んだ人を生き帰らせ、水を酒に変えたり、たくさんの食べ物に作りだしたりするような偉大な人であり、有名な人でしたが、最後には架に貼り付けられて死んだのです。

ですから、マスターの外見を見てはいけません。みなさんは自分の修行をしていけばいいのです。私はみなさんに証明を与え、一度体験を与えます。信じてもらった後は、自分で修行すればいいのです。マスターの外見を見てはいけません。それは解脱とは関係ありません。